



盤亀台の巖刻画拓本（蔚山蔚州大谷里）| 200余点を超える人物と獣、各種生活場面などが描かれている。

それらは呪術的意味を持ったもので、儀式に使われたと見られる。土でつくられた獣や人の模様の土偶も、やはり装飾としての用途の他に、豊穰を祈願する呪術的意味合いを持っていた。

岩面に彫られた巖刻画は、当時の人々の活気に満ちた生活スタイルを見せている。蔚州盤亀台の巖刻画には亀、鹿、虎、鳥などの動物と、鋸が刺さった姿をはじめさまざまな種類の鯨、網にかかった動物、檻の中の動物などが彫られている。これは狩猟と漁撈の成功と豊穰を祈るものと見られる。

高霊良田洞卵岬の巖刻画には同心円、十字型、三角形などの幾何学的模様が彫られている。同心円は太陽を象徴し、この巖刻画の遺跡は、他の地域の青銅器時代の農業社会で見られる太陽崇拝とともに、豊穰を祈る祭祀跡のような意味を持っている。

檀君と古朝鮮

青銅器文化の発展とともに、族長が支配する社会が出現した。彼らの中で強い族長は周辺のさまざまな族長社会を統合し、次第に権力を強化していった。

檀君の古朝鮮建国

檀君の建国に関する記録は『三国遺事』『帝王韻紀』『東国輿地勝覽』などに現れている。

族長社会でもっとも早く国家に発展したのは古朝鮮である。『三国遺事』や『東国通鑑』の記録によれば、古朝鮮は檀君王儉が建国したという（紀元前2333）。

檀君王儉は当時の支配者の称号だった。

古朝鮮は遼寧地方を中心に成長して次第に隣接した族長社会を統合し、韓半島まで発展したが、このことは琵琶型銅剣と支石墓の出土分布によって知ることができる。古朝鮮の勢力範囲は、青銅器時代を特徴づける遺物の一つである琵琶型銅剣と支石墓が出土する地域と深い関係がある。

古朝鮮建国の事実を伝える檀君物語は、わが民族の始祖神話として広く知られている。檀君物語は長い歳月を経て伝えられ、記録に残されたものである。その間にある要素は時代を降るにつれ、新しく加わったり、時にはなくなったりした。

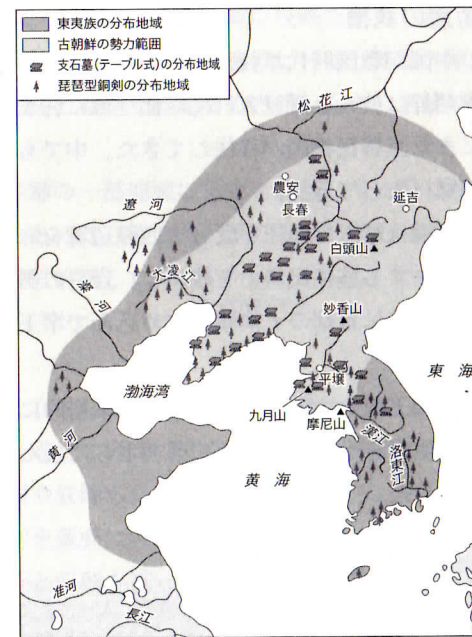
神話はその時代の人々の関心が反映されたものであり、歴史的な意味が込められている。これはあらゆる神話に共通する性質でもある。檀君の記録も同じように、青銅器時代の文化を背景にした古朝鮮の成立という歴史的事実を反映している。

このとき桓雄の部族は太白山の神市を中心に勢力を持ち、彼らは天の子孫であることを掲げて自らの部族の優越性を誇示した。また、風伯、雨師、雲師を置き、風、雨、雲など農耕に関係することを司らせた。

この時代の人々は主に丘陵地帯に居住し、農耕生活をした。私有財産の成立と階級分化によって、支配階級は農作業や



檀君の肖像



古朝鮮の勢力範囲 | 琵琶型銅剣と支石墓（テーブル式）は満州と北韓地域で集中的に発掘され、古朝鮮の勢力範囲を推定させる。